

センター つづしん

No.115



研究センター 30周年記念講演より

目次 2024年6月

子どもの風景 (第14回)	1
特集 研究センター 30周年・I	
記念講演	
「子どもと学校の危機をどう克服するか」	
佐藤 学	2
教育への思い・センターへの期待 (その1)	
かけがえのない今を生き、	
共に育ちあうために	渡邊 玲子 14
不安や悩み、何が要因?	岡崎 太郎 14
失敗できない空気	伊藤 慶 15
一石を投じること	藤井 和真 15
急がば回れ 急ぐ必要	村井 直美 16
ホントにあるの?	村井 直美 16
転換期に何が大事なのか	苫米地博昭 16
環境に適応できない(しない)側が、	
人間的に進化する!	堀籠智加枝 17
読者の声	17
教育時評	
学童保育とことば	後藤 篤 18
子どもと学校	
地域の伝統芸能を伝えたい	佐藤 正彦 20
おすすめ映画	佐々木忠夫 22
読書のすすめ (第16回)	矢部智江子 22
相談センター報告 (第35回)	遠藤理香子 23
一言	須藤 道子 24
子どもの風景 作品について	鈴木 裕子 24
センターの動き・編集後記	24

表紙写真：千葉建夫

題字：江島隆二

子どもの風景 第14回

朝の登校

そら(小6)

ぼくは、四月から近所の一年生といっしょに学校へ行っています。始めはその子のお母さんもと中まで歩いていましたが、一週間後からは二人だけで歩き始めました。ぼくはいつもその子に、

「今日は元気何パーセント?」

と聞きます。百パーセントの日もあれば九十九パーセントの日もあって、元気がない日もあります。この間元気九十九パーセントの日に、

「寒い。」

と言つてと中で泣き出してしまい、一度その子の家まで戻ったことがあります。正直大変だなと思いました。

でも、その次の日の朝、

「今日は、元気百パーセントだよ!」

と笑顔でぼくの所に来てくれた時は、とてもうれしい気持ちになりました。

子どもと学校の危機をどう克服するか

佐藤 学

イノベーションとネットワーク

今日の「子どもと学校の危機をどう克服するか」という課題はとても重いです。30年前ならもう少し軽くお話ができた。つまり構造的に極めて複雑になっているということです。危機という字は、「危ない」という字とチャンス「機」という二つの組み合わせでできています。危機は、チャンスでもあるわけです。どこにチャンスがあるのか。この両義性をいつも念頭に置きながら見なくてはいけない。と同時に、危機はいつも現場にあるのです。つまり教室にあり、学校にあり、自分の足元にあります。

昔、イヴァン・イリイチが、「プラグを抜く」と言った。プラグを一本抜くと全部が変わる。例えば、僕はガンジーを思い出します。ガンジーが抵抗運動で最初にやったのは糸車です。あらゆるところで糸車を回した。これが、インドの植民地の惨状から立ち上がっていく運動のきっかけになっていったわけで

す。現代は何かのプラグを抜けば解決するようなことではない。そこが難しいところです。いくつものプラグを抜かなければいけない。それらを教室をベースにして、あるいは学校をベースにして、どのように進めればいいのか。ここ30年ずっと考え続けてきました。

キーワードは、イノベーションとネットワークです。イノベーションとネットワークでしか今の社会は動きません。教育も変化しないというのが僕の確信です。実は『学びの共同体』を構想したのは35年くらい前ですが、その時もそう発想しました。いわゆる教育は、明治以来ずっと運動で変えようとしてきた。民間教育団体や組合がそうしただけではなくて、実は文部省・文科省は絶えず運動を起こしてきました。この運動による改革が限界に達した。運動による改革は、いくつかの問題があります。運動は中心を作ります。それからボスを作ります。それから画一化していく。その発想とは真逆の発想が必要ではないかと考えます。

学びの共同体の改革はネットワークです。中心がないのです。よく「佐藤先生、あなたが中心の指導者ですか？」と聞かれますが、「違います。学びの共同体のネットワークはあなたが中心ですよ。あなたの教室が中心。あなたの学校が中心」「先進校？先進校なんかありません。それぞれの学校が挑戦しているだけです。それが手を結び合うのです」と説明してきました。これがネットワークです。

一方、イノベーションとは何かというと、小さな改革がすべてを動かす。だから多数派になる必要はない。ただし、先取りしなければいけない。僕はイノベーションの一つの例としてデジタルカメラを挙げます。デジタルカメラは、15年くらい前に小さな会社が発明した。その時は、フィルムの方がはるかに性能は良かった。今、どうでしょう。全部デジタルカメラです。



未来を先取りしたからです。つまり後期資本主義になると、需要と供給とがバランスをとって一種の均衡状態になります。そうすると小さな変化が、全体を動かしてしまう。つまりイノベーションというのは、商品で言えば、新しい市場を作り出す。同じようなことが、ことごとく起こっている。アマゾンがそうです。スターバックスもそうです。つい最近では、チャットGPTです。チャットGPTはたった5年前に、わずか30人の会社が開発した。あらゆるものが、こういう変化の仕方をする。社会もそうだし教育も、もちろん経済も産業もそうです。そういう時代なんです。

私は、学校の改革に40年以上取り組んできました。最初の10年はことごとく失敗しましたが、このイノベーションという発想からやってきました。一つの学校ができれば世界が変わると思ったのです。茅ヶ崎市の浜之郷小学校は、市長も宣言し市議会も通し、21世紀型の学校を作る。しかも民主主義の学校を作るといふ機会を与えてくれました。この時は、体が震えて止まりませんでした。理由は、これで日本が動いてしまう。世界中が動いてしまうとわかるからです。学びの共同体の改革は現在、拠点校だけで全国300校あります。それから取り組んでいる学校は3000校を超えています。市単位で取り組んでいる市も30以上あります。もっとあるかもしれません。世界的にはどうかというと、昨年行った国際会議はなんと31カ国で、2000名以上の教育学者が参加しました。これは世界でやっている教育の国際会議で最大規模です。

日本経済の凋落と軍事費問題

もう一方で、現実に戻りますと、日本の株価が3万9千円と史上最高になるといふニュースが流れました。あたかも日本の経済が復調しているかのようには伝えている。本当にそうでしょうか。まったく知らされないことがたくさんあります。一つは、日本の株の8割以上は外国人が持っている。株価が上がれば上

がるほど、日本のお金がどんどん海外に流れ込んでいつている。これが、かつてと大きな違いです。要するに、日本はいいだしに使われている。もう一つは株価が上がるといのは、何を意味するのか。これは日本に限らずですが、貧富の格差が一層拡大していることを意味しています。だから株価が上がるとい、この一つのメッセージにしても、きちんと現実を見ないといけない。

実際、日本の経済の凋落はとんでもない状態です。30年前をちよつと振り返ってみます。世界のトップ30社の企業のうち21社が日本だった。日本のバブルの真つ最中ですが、バブルのお金だけでアメリカ全土が買えた。そして、この30年間に世界のGDPは4倍以上伸びた。世界の平均値が6倍以上伸びています。ところが日本だけ実質賃金が下がっています。今、上位50社のうち1社しか残っていません。トヨタが辛うじて49位に残っています。来年は転落します。このような30年間の凋落が、一体なぜ起こったのか。それは政治も社会も経済も産業も時代に見合ったイノベーションを何もやってこなかったからです。今からでもやらなければいけない。にもかかわらず、政治はまったく機能していません。経済は凋落する一方です。

この中で僕たちは子どもたちの現在から将来にわたる幸福を保障しなければいけない。これは教育の使命です。どのようにやるかをみなさんと一緒に考えたいと思います。

まず軍事費の問題です。今はGDPの2%にすると書いていますが、もしGDPの2%にするとアメリカ、中国について世界第3位の軍事費です。なぜ軍事費をそんなに増やす必要があるのか。北朝鮮のことを笑っていますが、日本もどんどん北朝鮮に近くなっている。このような状態をどう見るのか。ここから、まず考えていただきたいと思ひます。

それからロシアのウクライナの侵攻と、イスラエルのガザ地区侵攻です。特にイスラエルの状況は本当に悲惨極まりません。ジェノサイドです。ガザ地区には230万人の住民が、まさに

逃げ場がない塙で囲まれている。天井のない監獄と言われますが、監獄は刑期が終われば出られます。ガザは、もう天井のない強制収容所です。すでに2万8000人が亡くなったと報じられています。報じられていないこととして、半数以上は15歳以下です。つまり犠牲者の半数以上は子どもたちです。そういう殺戮が今も続けられていて、しかも多くの国々がイスラエルを支持している。20世紀あれだけの戦争を経ってきた人類が学んだものは一体何だったのか、そういう無力感を感じざるを得ません。即時停戦させなければ、世界大戦になりかねない危機を孕んでいます。その中で日本は軍事費をどんどん増やしていくような状況ではない。しかし、極東地域の平和と安全とか、台湾有事の危険性が語られます。とんでもない話です。ちよつと考えてみてください。

日本と中国とは輸出、輸入とも26%を依存しているのです。アメリカは13%です。もし台湾が仮に有事になって、日本が米軍と一緒に行動したとします。中国は当然、経済封鎖をします。そうなれば日本経済は全部崩壊します。つまり日本は動けるわけがない。危機感だけ煽って国民を動員しようとしている。これが軍事費増強の本質です。だから虚構の危機を煽って軍事的な動員をしていく。そういう全体主義国家が今つくられようとしていると見た方が正確だと思ひます。そういう問題として現在の日本の状況を考える必要があると思ひます。

コロナ・パンデミック最大の犠牲者

一方、新型コロナウイルスです。先ずは、大前提をちよつと考えていただきたい。パンデミック、これは人類が何度も何度も経験してきました。現在の人類は20万年前に誕生しますが、パンデミックは何百回となく繰り返してきました。人類は、それだけウイルスと戦って来たのです。つまり、COVID-19と言われる今回の新型コロナとの共存が、これから始まっていく。もう一つ理解してほしいのは、パンデミックは、これまでも社会と

世界を破壊してきました。メソポタミア文明が滅びたのも、エジプト文明が滅びたのも、ローマ帝国が滅びたのもすべてパンデミックです。また、パンデミックによって破壊された世界と社会は、元に戻ったことは一度もありません。だから新しい社会、新しい世界を作らなくてはいけない。

これを教育に置き換えると、私たちは元の学校、元の教室に戻すような改革をしては失敗するということです。今、私たちに必要なのは新しい教育です。新しい学校、新しい教室を新しい社会や世界に対応して作っていかなくてはいけない。そういう立場が、何より必要だということです。

もう一つ考えていたいただきたいのは、パンデミックの最大の被害者は子どもたちだったということ。新型コロナウイルスはサーズの変異型で、ゲノム分析すると98%までサーズと一緒です。これは4年前から分かっていたことです。ですから学術名もサーズCOVID-19、サーズという名前がついています。サーズは10代以下はほとんど重症が出なかった。死者さえ出ませんでした。したがって約4年前には10代以下の子どもは感染しても重症化しないことが分かっていました。実際、コロナによる感染者の重症化率も19歳以下の場合だと0・24パーセントと極端に低く、致死率もすごく低い。多くの国で、10代以下で死んだ子はほとんどゼロに近い。つまり、子どもたちにとって学校は一番安全安心な場所だったんです。にもかかわらず、世界186の国が学校閉鎖しています。つまり、子どもたちが犠牲にされたという事です。これはとても重要です。

このコロナによって子どもたちの生涯賃金は約30%失われた。これは平均ですから、貧困層はもっと落ちていきます。ところが富裕層の子どもは70%生涯賃金が伸びている。どういうことかという、全体が中間層を含めて転落すると、その跳ね返りが富裕層の子どもたちのところに行く。つまりコロナは自然災害ですが、コロナの被害は極めて階級的、階層的に作用しています。例えばアメリカで学校を開校しようというのは貧困

層から起こりました。富裕層は学校閉鎖、開校反対です。つまり、自分の子どもたちにたくさんのお金、見返りが来るからです。日本でもシングルマザーの問題がとても深刻で、3分の1以上のシングルマザーの親がコロナ期に失業して、収入ゼロを経験している。それからシングルマザーの3分の1の子どもたちが、1日に1食も取れない日々を経験しています。こういうことは教室では見えない。とんでもないことが子どもたちの中に起こったと教師たちがちゃんと理解してもらえればと思います。

第4次産業革命と子どもの幸福

一方で新型コロナウイルス禍の中で、第4次産業革命が加速度的に進行しました。第4次産業革命というのは2016年にいわゆるダボス会議といわれる世界経済フォーラムが定義した名前ですが、現実にはそれより4年前の2012年にドイツからスタートしています。人工知能とロボットによる産業革命です。すでに2025年には世界の労働の52%が人工知能、ロボットに全部変わってしまいます。これまでの産業革命と今進行している第4次産業革命は根本的に違いがあります。何が違うかというと、第4次産業革命は、単純労働はもちろんですが、頭脳労働をもつばら機械化します。したがって新しい雇用は生まれますが、新しく生まれてくる労働の需要は、現在ある知的労働より高度になってきます。そこに向けて子どもたちを教育しなくてはならない。そうしなければ子どもたちは、「無用階級」になってしまう。「無用」つまりどこからもいらぬ階級ができてしまう。これが極めて重要です。現在の小学校6年生の子どもたちの65%が、今はない仕事に就くことになりました。だから、そこに向けての教育を考えなければいけない。これが今、世界中の教育が一生懸命立ち向かっている壁です。その意味で、学びのイノベーションを絶対にしよということなのです。

実際、現在あちこちで解雇、首切りが始まっています。どの業種が日本で今一番解雇が進んでいるかご存知ですか。それは

三菱UFJとか住友信託とかみずほなどのメガバンクです。50代以上で、みんな肩たたきです。考えてみてください。たった15年、10年ぐらい前まで金融業というのは大卒の就職人気一番だった。今はもう完全に落ちています。つまり社会が大きく変わる。そうすると、いい点を取っていい学校に行っている大学に入っている会社に入るのには決して幸福な道ではない。もうそのルートはなくなっています。要するに学歴価値というものが意味を持たなくなっているんです。そう考えると、ここからが重要ですが、どういう教育が子どもたちの現在から将来にわたる幸福を保障するものなのか。これを原点から考えなおす必要があると思います。

私は学ぶことが大好き、探究が大好き、協同が大好き、生涯にわたって学び続ける。こういう子どもたちが将来の社会に参加できる。もっと言うならば、自分で会社を作る、仲間と一緒に起業する。地域の経済を支えていく。実際、ヨーロッパや先進国はみんなそうなっている。この転換を図らないと子どもたちの将来、あるいは地域の将来は作れないということです。

いい例が中国です。中国はご存知のようにコロナ後、経済が停滞し、経済危機が押し寄せました。これは公表されていませんが、大卒の4割以上が就職できない。失業している。若者全体でも4割以上です。なぜこういうことが起こったかというところ、中国の授業と学びは、日本以上に改革が遅れているからです。子どもたちは従来通りの企業に就職することしか考えない。起業する力なんかない。自分たちで経済を作り出す力がない。

かつて世界の経済を順調にしているところと、順調にいないところを比較した研究がありました。ロバート・D・パットナムというハーバード大学の政治経済学の教授が『ポーリングアローン』という本を15年くらい前に出してベストセラーになった。ポーリングを一人でするって考えられますか？ポーリングは仲間と一緒にやるものです。ところがアメリカのポーリング場に行ってみると、みんな一人でやっている。つ

まり人々の結びつきが全部切れてしまったことを表す象徴的なタイトルなんです。この本でも面白いことを分析しています。世界の経済で一番順調に動いているのは北イタリアとフィンランドだと言うんです。確かに当時そうでした。この北イタリアとフィンランドを調べると、ほとんどの人が起業して自分で中小企業をやっている。つまり21世紀は、大企業の時代ではなくて、実は中小企業の時代になると論じている。経済資本、文化資本も重要、ただ一番重要なのは社会資本、人と人のつながりなんだと。北イタリア、フィンランドは人々のつながりがあって、コミュニティが生きている。これが、これからの経済の一番の基盤になってくると書いています。アメリカ経済がうまくいかなければ、人のつながりがバラバラになってしまったからだと分析している。実際、僕は10年くらい前に北イタリアのエミリア・ロマーニャに調べに行つて、びっくりしました。何にびっくりしたかというと企業数です。企業数が世帯数の2



倍。つまり、お父さん、お母さんは会社に勤めていて、帰ってくるのと別の会社をやっているんです。ネットで何か売るとか、ブレスレットを売るとか、パンを作って売るとか、そういう時代だということですよ。これはフィンランドも一緒でした。つまり将来の日本の経済の形です。大企業の就業人口は2割か3割しかない。後はなんらかの中小企業になります。この中小企業的なものをより経済の中心に置いて活性化するような社会以外に、僕は日本に道はないと思います。また、それを担えるような子どもたちを育てていく。そういうイメージを持ってもらえばいい。

ICT教育教育産業のビッグビジネス化

次に、ICT教育市場の話です。ICT教育が爆発的に普及しています。一つは、第4次産業革命下でICT教育がビッグビジネスになっている。今、ICT教育市場というのは、コロナ前は600兆円、現在は1000兆円を超えました。グローバル自動車市場の5倍です。世界的な一番大きな教育産業はピアソンというイギリスの会社ですが、ピアソンを中心としてグローバルネットワークを作っています。日本で一番大きいのはベネッセです。2番目は公文です。いずれ日本の教育産業すべてがピアソンをはじめとするビッグビジネスに飲み込まれてしまいます。ここで重要なのは、このICT教育市場が今行っていることは公教育の乗っ取りだということです。30年前までの資本主義は国家独占資本主義だったんです。これが一気に崩れました。グローバル資本主義です。そうすると国家は、どの国も財政赤字になって、教育財政が負担になってくる。なぜなら人材は世界にありますから、国民を一人ひとりいい人材にしないでいいわけですから。

そしてIT企業が、公立学校を買い取るわけです。国から委託を受けて、コンピュータで教育や授業をやれば教師を半分クビにできる。企業はばる儲けですよ。このターゲットになって

いるのがインドです。実際、今のインドでは都市部は50%以上が民営化されてしまった。農村部でも30%、これは企業が経営している。つまり公費による委託を受けて運営している。実は、先進国のスウェーデンでもすでに20%以上がIT企業に乗っ取られました。なぜかというスウェーデンは移民が多い、4割も移民です。政府からすると移民の子たちが負担です。そういう子どもたちは、もうIT企業の経営する学校にやってしまえという話です。民営化されてどんどん売り渡されている学校は、ほとんど低学力の学校、貧困地域の学校、移民の学校です。こういう形で、今教育の資本主義が動いている。

他人事でないのは日本のGIGAスクールです。1校あたり3000万円ぐらいかかっている、なぜ特別予算なの？なぜ通常予算じゃないの？なぜあのコンピュータは買い取りなのか？リースじゃないのか？考えてもらおうとわかります。あと2、3年後には全部替えなければいけない。そんなお金どこの地方自治体も持っていません。ここで登場するのがIT企業です。これをどうやって阻止するか。僕は都道府県や市町村の教育のオートノミー（自律性）がとても重要だと思っています。つまりIT企業をまったく無視した今後の教育は考えにくい。その時に公共性と民主主義、これをやっぱりコントロールしないといけない。つまり教育の企業と産業をコントロールする。そうでないと極めて危険です。もはや政府や文科省にてもらえることは、僕はもうほとんどないと思っっている。自分たちで地域を作る、自分たちの学校を作ると腹を括った方がいいと思います。

宮城県でも学びの共同体の改革がかなり広がってきました。全国的にみると非常に遅れていたんですが、それでも例えば塩釜がいい成果を上げています。富谷市、最近では東松島市が動き出しています。僕が期待しているのは、こういうことなんです。塩釜市教育計画を作る。それから富谷市教育計画を作る。東松島市教育計画を作る。そして10年計画ぐらい持って、地域の学

校は地域で作っていく。いろんな財源の保障も考えなければいけない。もちろんIT教育とのつながりも、学校と教師と教育委員会の自律性で守っていくということをやらないと大変なことになるという話です。

コンピュータ使い方の問題

実際、IT教育について言うと、日本ではちよつと異様な現象が起きました。どの国もコロナで学校閉鎖期間はコンピュータのオンライン授業がフル回転でした。ところが日本では学校閉鎖期間のオンライン授業は、なんと小学校、中学校で5%。ところが学校が再開したとたんにどの教師もみんなコンピュータを使っている。世界はどうかというと、学校閉鎖が終わった後はコンピュータは学校から消えました。この理由は後で言います。今コンピュータがわーつと使われているのはアフリカと南アジアです。これはさっき言ったように教育産業のターゲットです。もうIT教育の植民地になってしまっている。イギリスとかアメリカの企業がポロ儲けしています。大学もそうです。東京大学は毎年30000人の入学者がいますが、オンラインでも世界に発信して授業をしています。その学生数は24万人です。ドル箱になっている。オックスフォードやケンブリッジやハーバードやスタンフォードも同様です。つまり大学が企業体になっています。でも、これらの大学がオンラインで授業をするかという絶対にはやらない。教育効果がないからです。このからくりを知らなければいけない。マーケットになっているのはアプリ力であり中南米であり南アジアなんです。こういう構造がICT教育のビッグビジネスの構図になっています。

では、実際にICT教育がどれくらい効果を持つかという話をします。マッキンゼイがコロナ直前に大規模調査をしました。51カ国で34万人もの教師と子どもたちを対象にした調査です。コンピュータを1人1台使った場合、それから教師と子ども

も・生徒が一緒に使った場合、教師だけが使った場合の教育効果です。その結果わかったことは、効果があるのは教師が1人で使った場合のみ。1人1台は最もダメージが大きい。一番いいのはプロジェクトとして使うことです。コンピュータが悪いわけではない。コンピュータは道具ですから。つまり現在のコンピュータの使い方が間違っているということです。今のようないい使い方だとダメージが大きいという話です。

次に、地域別にみると、一番ダメージが大きい地域はアジアです。なぜアジアが一番ダメージが大きいのか。それはアジアだけが未だに一斉授業が残っているからです。つまりコンピュータは、一斉授業の学習環境で1人1台で使うと一番ダメージが大きいのです。

もう一つ信頼できる調査にOECD調査があります。コンピュータの教育効果に関する調査です。コンピュータは学校で使えば使うほど学力は落ちます。このことは、すでにほとんどの国が10年前に分かっていました。なぜなら10年以上前に、1人1台はほとんどの国が準備していたからです。だから学校が開校したら使わない。それを知らない日本とかインドとか台湾は、コロナの時に1人1台で、一挙に使い出しました。こういう状況にあることをまず理解してください。

何度も言うようにコンピュータが悪いわけではありません。使い方がおかしいのです。まず第1に教える道具にしたらダメージが大きい。学び、探求と協同の道具にすればいいということですが、でも、そういう使い方はほとんどされていない。それから2つ目、コンピュータは深い思考、探求的学習には適さないです。例えば、ある言葉の意味を調べるのは、インターネットなら1分でできます。そういう意味では便利です。ところが、知識や情報を使って探求するのはコンピュータではできない。どうしても少数人数のグループワークが必要です。それからコンピュータはどうしても学びを個人化してしまう。ロイロノートを使うと、みんなの意見を1枚に貼り付けて共有できますが、

教室で共有できていくわけではない。当たり前ですよね。この当たり前のことがわかっていない。

1週間くらい前に、「生成AI時代における学校教育と学校図書館の役割」というタイトルで講演をしました。みなさんチャットGPTをご存知ですね。使っていない方もいらっしゃると思うのでちょっと説明しますと、例えば佐藤学の教育学の3つの特徴を教えてくださいと、上手に答えます。佐藤学は東京大学名誉教授から始まって、特徴は第1に……。ところが、それは全部どこかの紹介文をつないただけです。ちなみに生成AI時代における学校教育の役割はどうなりますか？と聞いたら、何かもつともらしいこと言うんだけどまったく答えられないです。つまり先例がないからです。チャットGPTは対話型人工知能と言いますが、何ら対話していません。人工知能と言うけど何ら思考していません。あるパターンを読み取って、頻度の高いものを統計的に導き出してつないでいるだけです。騙されてはいけない。僕は、その講演で文字媒体で伝えられるものは全部文字媒体の方がいいと話しました。先生が目当てを教えるとか、ワークシートとか、課題を出すとか、資料を出すとか。みんな紙媒体の方が絶対有効です。ところが先生が紙媒体で準備できないものは、子どもたちが自分でコンピュータを使って調べればいいんです。すごく深まります。それが基本と思えばいいです。要するにどこまでが電子空間の媒体が有効なのか。どこが文字活字空間の学びで有効なのか。はっきり区別して使うとすごくいい。

例えば英作文なんかで、子どもは語彙も少ないし文法もあまり知らないし、表現のパターンも貧弱ですよね。だから機械翻訳使って出てきたものを参考に自分で書く。編集し直して使うとすごく表現の幅が広がります。そういう学び方は、英語の学びとしてもとてもいいと思っています。要は使い方です。

子どもの危機 学びと文字からの逃走

一方で子どもの危機です。高校生・大学生の6割が、月に1冊も本を読んでいません。重要なのは高校3年段階で不読者になると、大学に行こうが社会人になろうが一向に変わらないことです。文字活字を読む量が世界一低い。学習時間も日本の小学生、中学生、高校生は世界一低いです。つまり、学びと文字からの読書からの逃走が始まるのです。要するに諦めてしまっている。月に1冊も本を読まない子は、小学校1年生でも15%を超えています。こうなると、子どもの時にどれだけ本に親しみ本を読む習慣をつけるかが、すごく重要だと思うんです。コンピュータをやっている場合ではない。

もう一方で、日本の学級定員は世界で3番目に多いのです。一番多いのは中国です。2番目がチリで、3番目が日本です。これ学級定員を35人にしても同じです。さらに言いますと中国とチリは、今、学級定員を30人に減らそうとしています。この状況で学びのイノベーションをやらないといけない。厳しいです。

それからもう一つ重要なのは、日本の大学進学率は63%で世界54位です。これは短大も含めてで、国際標準では短大は大学とみなしていません。だからそれを引くと多分70位か80位になってしまいます。先進国はみな90%を超えています。それからカナダやオーストラリアやスイスなんかは130%です。どういうことかという、大学卒業してまた大学に行くから100%を超えてしまうのです。お隣の韓国や台湾も95%を超えています。つまり日本で、高卒でまだ就職があるのは日本の経済が世界最低レベルに落ち込んでいるからです。これが世界並になつてくると高卒の求人はいなくなります。

最も深刻なのは、未だに19世紀型の教室が残っていることです。今残っている国は北朝鮮、中国農村部、ベトナム農村部、それからアフリカの極貧地域、つまりサハラ砂漠以南です。他は消えています。残っているところは、みんな社会主義国、あ

とは日本だけ。みんな変わったのです。教師は、どの国も極めて保守的です。自分の教え方を変えようとしません。どうやって変えたか？ これはいろいろなパターンがあります。カナダやオーストラリア、ニュージーランドは自分たちで変えていった。フィンランドやスウェーデンもそうです。では変わらなかった国はどうしたか。イギリスやノルウェーは、法律や罰金で強制的に行った。なぜそんなことをしたのか。それは変えないと、その国の経済が凋落するからです。一斉授業というのは単純労働者の効率的養成システムです。150年前から実はエリート教育は、全部アクティブ・ラーニングです。例えば東京帝国大学には講義室はほとんどありませんでした。ハーバード大学で2006年に1年間教えました。ハーバード大学にも講義室はたった2つしかない。昔の海軍兵学校もそうでした。全部アクティブ・ラーニングです。グループか、要するにゼミナール形式です。単純労働がなくなったから全部エリート教育をしなくてはいけなくなった。だから変わったんです。

教師の危機 研修時間と財源の削減

もう一方で、教師の危機は極めて深刻です。働き方改革を言っています。変な話です。同業者の教育学者にも僕は怒っている。最初に、この働き方改革のために教育学者12人で連帯して取り組みました。その時は給特法廃止だったのです。それでしか解決できません。つまり超過勤務手当を出せということです。今の給特法4%というのは給特法ができた当時の月あたり平均の超過勤務時間8時間をもとにしている。今は10倍以上になっています。だからまったく実態に合っていない。超過勤務手当をちゃんと出せば、一挙に変わっていきます。これがまっとうな考え方だと思っただけですが、いつの間にか授業時数を減らしてというような話になっている。その結果、一番減ったのが研修時間です。これはもう本当に深刻です。

1966年の文部省調査と2018年の文科省調査を見る

と、この50年間で教師の個人研修の時間は3分の1に減っている。校内研修に至っては5分の1に減っているんです。あとは教師が学ぶための研修の財源が減っています。中国の中学校1校あたりが持っている1年間の教師の研修費はいくらだと思いますか？ 中国は1千万円です。日本はほとんどない。ゼロに近い状態です。中国では各地方行政の4%は、教師の研修費に充てるという法律があるんです。お隣の韓国や台湾も、1校あたりだいたい500万円です。みんな「えー」と驚くかもしれないけど、実は50年前、僕が20代の頃は日本も各学校それぐらい持っていました。日本は、どの教師も1泊2日で全国どこでも研修に行けた。その旅費と宿泊費等々、全部足したら500万円ぐらいになる。それがほとんどゼロにまで落ち込んでしまった。これで教師を支えられるかという話です。教師は学ばないと生きがいをつかめない。教師を支える方法は、学びを保障することです。教師は専門職ですが、そこが枯渇している。これが教師が潰れている非常に大きな原因になっています。

もう一方で、教師の教育歴がこの30年間で世界トップクラスから最下位に落ちてしまった。どういうことかというところ、今、世界の教師のスタンダードは小学校から高校はもちろんですが修士号を持っています。初任者に関してはアフリカも含めてすべてと言っているくらい100%修士号を持っています。ところが日本の状況を考えてみてください。小学校は5%、中学校でも7%、高校でも10%です。これはアフリカ諸国も含めた世界で一番最下位です。この状態を続けて、現代にふさわしい教師の仕事の保障できるのかという話です。だから、これは特別予算を組んでも、例えば5年勤めると無償で給与はそのままにして大学院に行けるといって保障をやるべきなのです。どの国もそれをやったのだから、そうやって教師を支えないといけない。そうしないと若い教師たちがどんどん潰れていきます。

『学びの共同体』の方法と成果

もう少しだけお話しします。学びの共同体の改革です。申し上げましたように、私は21世紀型の新しいイノベーションとネットワークという形で進めてきました。

一つ例をあげます。この2年関わったところで一番私が印象深く学んできたのは川口市です。川口市は1962年に作られた「キューポラのある町」という映画で有名です。キューポラというのは鋳物工場の煙突ですが、1970年代に全部消えましました。つぶれたのです。広大な空地ができて、そこは全部風俗街になった。関東の人はみんな知っています。関東で最大規模の風俗街ができた。ところが10年ちよっと前に新風営法ができて、違法行為をやっていたので全部つぶれたのです。その広大な空地には中国人とクルド人が住みついた。だから中国人の人口は横浜を超えました。

学校はとても困難です。埼玉県の中で一番困難な地域です。異動届で誰も川口と書きません。76校あるんですが最も困難なのが川口北中学校と神根地区9校です。神根地区は中学校3校、小学校6校です。2年前にぜひ何とかしたいと依頼が来しました。それで状況を聞くと、事故件数（対教師暴力、対生徒暴力、器物破損）が年間150件以上です。こうなると学校が終わると先生方は、警察に行くか児童相談所に行くか家庭訪問です。全員夜の10時ごろまで。そういう状況ですから当然授業は成立していない。生徒の半分がもう教室からいない。廊下はバイクが走り回っているというような荒れた状態です。したがって保護者からの苦情もとても多い。年間100件以上です。ともかく殺人以外はすべて起こるといぐらいにとんでもないことが起こるわけです。ですから学力は埼玉県の430数校ほど中学校があるのですが、ずっと最下位です。

依頼を受けて一斉に取り組み始めました。学びの共同体の改革は、改善ではありません。革命です。革命は、ゆっくりやっ

たら失敗します。準備して一挙にやるのです。4月に一斉に始めて2か月後の6月には、みんな暗いんだけど机について一応学んでいる。最後まで机につけない女の子が3、4人いました。一人ひとりから話を聞きました。一番困難な子は、その子の目の前で、コロナ禍にシングルマザーのお母さんが、焼身自殺しています。その子は、体じゅう火傷しながらお母さんを助けようとしたけど、助けることができなかった。他の3人も話を聞いたなら、全員の親がやっぱり自殺をしているんですね。しかも第一発見者なんです。抱えている問題を言ったらもう切りがない。それをみんな受け止めて、支え合ってやってきました。重要なのは、今からお話しますが、あることをやれば全員が必ずここまて来るんです。

1年後ですが、びっくりました。女の子たち、



みんな明るい。明るい女の子たちと優しい男の子たちが本当に助け合っているんです。先ほど言った150件の事故件数、何件くらいまで減ったと思いますか？ ゼロです。この2年、1件も起こっていません。すごいでしょ。不登校は150人いました。これが30人まで減りました。年間100件あった親からの苦情はゼロです。問題の430数校の最下位だった学力は、全教科で平均点を超えました。つまり、さっき言ったように可能性があるんです。佐藤先生はゴットハンドを持ってるとよく言われますが違います。僕はゴットハンドを持っていない。子どもたちが持っているのです。すべての教師たちが持っています。それをどうやって引き出すか、ここが知恵なんです。

では何をやったか。まず①ビジョンを共有する。共有しないと話が始まりませんから。すべての子どもの学ぶ権利を保障すること。②その学びの質を高めること。すべての教師が授業を公開して学び合うこと。専門家として成長できる学校を作ること。③8割以上の親たちが協力してもらえる学校を作ること。この3つです。他はやらない。そのためにはまず机の配置を変える。これはすごい効果があります。ぜひ、やってみてください。場と関係を変えるんです。これで、ほとんどの学校で解決します。聞き合う関係、競争の関係から協同の関係、助け合う関係です。それからすべての授業を前半は、教科書レベルの「共有の学び」にしてグループでワークシート。後半は「ジャンプの課題」と言うんですが、3分の1が分かかって3分の2が分からないぐらいのレベルをみんなに挑戦させます。これで、みんなが学ぶことが大好きになっていきます。これがコツです。これを全授業でやっています。先ほど言った革命です。あとは全部の先生が全員教室を開いて学び合う。これが成功したので、周りの学校全部で始まりました。川口市だけで1年間に15校ぐらいたが勉強して今やっている。高校も巻き込んでやっています。そうなると市や教育委員会も動きますよね。こういうことを今、全国でやっています。世界的にもやっています。

教育は公共財

連帯し教育の危機を乗り越えよう

あと注目してほしいのは2021年のユネスコレポートです。実は、日本だけまだ翻訳本が出ていなくて、来年東大出版会から「未来の教育」というタイトルで出るらしいです。他の国では、教師たちはみんな読んでいます。なかなか面白いレポートで「Reimagining Our Future Together」。ユネスコは、これまでも3つ重要なレポートを出しています。有名なのは1996年のレポートです。「Learning to know, Learning to do, Learning to live together, Learning to be.」知るために学ぶ、行動するために学ぶ、共に生きるために学ぶ、人として存在するために学ぶという、学びの4つの目的を謳ったことで有名です。それ以来のレポートです。今回は翻訳すれば、『私たちの未来を共に再構築する教育のための新しい社会契約 (A New Social Contract for Education)』すくく面白いですよ。新しい社会契約、すごいタイトルです。古い社会契約というのは、トマス・ホップズとジャン・ジャック・ルソーです。ホップズは『リヴァイアサン』を書いた。野蛮な戦争状態の社会から秩序ある市民が主人公になる市民社会をリヴァイアサンにたとえて構想した。いわゆる市民の共和国です。ルソーは、ご存知のとおりです。これがフランス革命を準備した。世界の市民革命を準備したわけです。つまり、現代の民主主義を準備したのが古い社会契約です。それではもう足りない、新しい社会契約が必要だと言っているんです。僕もそう思います。今までの市民社会の社会契約、あるいは民主主義はもう機能してない。新しい民主主義が必要、新しい社会秩序が必要、新しい社会システムが必要だということです。こういうことを言っているかというと、現在の人類は「地球の危機」と「ヒューマニティの危機」に立っていると言っています。この「ヒューマニティの危機」の翻訳は難しいけれど、「人間性の危機」と訳していい

と思います。ヒューマニティという言葉は人間の尊厳、それから人権、あと教養全部を含んでいます。それらが危機になっている。地球環境の危機はいいですね。この2つを超える新しい社会契約が必要。そのために何が重要かをいくつか言っています。

中でも2つのことが重要です。知識と教育は公共財コモン・グッドといって、みんなのものですよと。今、知識はそうっていない。みんな私物になっている。僕の教育学でさえ市場で売られて、僕にお金が入ってくるわけです。アインシュタインは一銭も稼いでいない。知識が公共だったからです。今は、大学の研究は全部お金がついて回る。私物化になっています。大学は企業体になって、それを売って経営している。これは公共財にすべきです。つまり、あらゆる知識がみんなのもの、教育はまさにそうです。みんなのものとしての公共財にしようという提案です。だから民営化なんでもってのほかです。つまり教育と知識をみんなのものにする、そういう改革を進めましょう。そのためには「協力と協働と連帯の教育学」が必要だと言っているんです。これはすごい言葉なんです。なぜなら近代の教育学、ルソーにしろ、ロックにしろ、これは個人の教育学なんです。学びも個人だったわけです。教師の仕事も個人だった。それを想定して教育学は全部つくられている。これをすべて協力と協働と連帯、そういうペダゴジー（教育学）を作って教師同士も連帯しましょう。教育学者もみんな連帯しましょう。そしてこの新しい社会契約にもとづく人間の尊厳と地球環境の保護とそれから世界の平和と民主主義、これを実現できるようなネットワークで、この教育危機を乗り越えましょうという提案なんです。極めて画期的だと思います。私たちが求めているもこの方向でしょう。

（東京大学名誉教授）

結論

- 1. 「子ども＝人材」「教育＝人材養成」なのか。「人的資本(human capital)論」そのものを問い直す必要がある。子どもは「人材」ではない。
- 2. ICT教育の追求している「個別最適化」は、子どもの学びを促進するのか。また、それは教育と言えるのか。ICT技術は未来の教育に必要なだが、ICT技術が「未来の教室」を準備するのではない。
- 3. ICT教育の最大の誤りは、コンピュータを「教える道具」として活用しているところにある。教育においてコンピュータは「学びの道具」(思考と表現の道具:探究と協同の道具)として活用されなければならない。しかし、現在のコンピュータの教育ソフトは大半が「教える道具」であり、学校においてコンピュータは「教える道具」として使用されている。
- 4. 第4次産業革命は、教育に対して「コンピュータ活用」を求めているのではなく、「創造性」と「探究」と「協同」の学びを求めている。
- 5. 膨張する教育市場によって、公教育は危機を迎えている。貧困な子ども、低学力の子ども、保守的な授業形態の学校が、教育産業とIT産業の標的になっている。
- 6. ポスト・コロナの社会は、資源と資産を共有し合う社会、人々が相互に助け合い支え合う社会、未来に向かって学び続ける社会、すなわち sharing, caring and learning community である。この社会に向けて、一人も独りにしない教育で子どもたちを守り育てる必要がある。

教育への思い・センターへの期待 (その1)

かけがえのない今を生き、共に育ちあうために

渡邊玲子

「理想の子どもとは？」と問われたら、「理想の子どもなんていませんよ」こう答えたい。みんな、それぞれ、一人ひとり、そのまま、あるがまま、それでいい、それがいいと思うからだ。理想の親も、理想の子育ても、みんな同じ。みんな、それぞれ、悩みながら迷いながら、でも、うちの子が一番かわいい、なんて時に親ばかりしながら、必死に子育てをしている。そんな姿が、たまらなく愛おしい。だから、かけがえのない今を共に生きる者として、子どもたちや親たちに寄り添い、支え、共に育ち合いたいと願う。

4月、園の隣の公園に子どもたちと散歩に行き、土筆（つくし）と蓬（よもぎ）を摘んでくる。土筆はおひたしと天ぷら、蓬は蓬団子と天ぷらに。子どもたちと一緒につくる。野菜嫌いな子たちもごぞつて手を伸ばす。夕方、お迎えに来た母親に話すと、目を丸くして驚き顔をほころぼせる。5月にはたくさんの梅を取って意気揚々と散歩先から帰ってくる。梅シロップ、梅干し、梅ジャムを作りたいと次の日から子どもたちは梅仕事に余念がない。公園ではプラスチックごみを拾う姿もある。「マイクロプラスチックになったら大変」「SDGsだから」と。昨年の年長児が遊びの中から辿り着いたSDGs。綺麗な森と海と街を残したい、SDGsはまだまだ続くと言って卒園していった。その思いが今年の子どもたちに引き継がれている。

子どもたち一人ひとりが興味関心を持ったことに熱中し、時に思い通りにいかず、何故？ どうして？ と生まれた疑問から、もっと知りたい、今度はこうやってみようとして試行錯誤を繰り返し、仲間と話し合い、伝え合い、その先の達成感を子どもも大人もみんなで味わう。そんな遊びと暮らしを、これからも、大人も子どもも、小さい子も大きい子も、地域の人たちたちも、みんなでごちゃまぜにつながり合いながらつくりたい。

子どもも大人も、かけがえのない今を生き、共に育ちあうために。

(認定こども園つむぎ野・園長)

不安や悩み、何が要因？

岡崎太郎

最近、ふと気になったことがある。

教室の中で拾った落とし物を持ち上げ、「誰の？」と聞くと、その場ではまず持ち主が出てくることは少ない。職員室前のショーケースには、明らかに特徴的なハンカチやら何やらがたくさん並んでいる。

球技の運動部でバリバリ活動している子が跳び箱の授業になると体の不調やケガの悪化を訴えてくる。みんなから見られないような練習の場を用意しても、やりたくないらしい。

若手の先生が他の先生たちから「〇〇の活動は、先生の自由にやっていいよ」と優しく言われることが不安でたまらないという。「いったいどの先生のやり方が一番正解なのか」と涙ながらに質問してくる。

毎日のように何らかのトラブルが起こる。子どもたちに話を聴いたりするが、それぞれの主張が食い違うことがほとんどだ。家庭に説明する時にも、ほんのちょっとした言葉の選び方で、ますます事態が悪化することもある。

子どもも親も教師もが、いつも不安や悩みを抱え、それを色んな形で表現している。自分と他者と社会との関係、これまでの経験によって、自己防衛するためのバリアーが幾重にも重なるように形成されているのか。それが自分の発達の欲求、真理を求める行動欲求に歯止めをかけてしまっているのか。

(仙台市・中学校)

失敗できない空気

伊藤 慶

職員会議でよく出る「学力向上」という言葉を聞いて何を思い浮かべますか。私は「学力テスト」です。それでは、「学級経営(作り)」という言葉はどうでしょうか。1年目の先生は「圧を感じる」と話しました。「学級を壊せない」プレッシャーを感じているとのこと。私も感じます。「学力を付けよう」「よりよい学級を作ろう」ということは何も間違っていない。しかし、学校でよく出るそのキーワードは、私たちをがっかりさせます。これは何なのでしょう。何度も何度も言われ続けていると、「学力テストの平均点を上げろ」「学級を壊すな」というメッセージに聞こえてきます。校長先生が意図していなくても現場ではそのように響き、それは学校の空気＝当たり前になったように感じています。

この空気をまとった学校、教員は子どもとどのように関わるのでしょか。「分かる授業」をより一層推進します。丁寧に丁寧に指導を重ねます。子どもたちは、分かることやできることが大切だと、目の前に立つ先生から強く感じていくのだと思います。同時に、「できない・分からない」が許されない空気も生まれてきます。教員も子どもも「失敗できない」空気に支配されているのだと思います。

また、「学級を壊せない」と感じる私たちは、子どもたちへの指導が強くなる傾向があります。学校の規律や規則を徹底しようとし、学校を壊さないためです。

さらに「失敗できない」空気を強めるものがあります。ちょっとでも失敗を許さない社会の空気(純白でいることを求められる社会)と競争です。「給食を残すのが怖くて学校にいけない」という相談が先日ありました。以前でしたらそんな理由は考えられませんでした。ちょっとの失敗も許されないと感じているのだと思います。

では、どうすればよいのでしょうか。自分が本当に大切にしたいものを自分の言葉で子どもたちに語ることもなのだと思います。ある意味「人間(自分)」を取り戻すことなのだと感じています。(富谷・富谷小)

一石を投じること

藤井和真

センター設立30周年おめでとうございます。私が正規の教員になって31年目。センターと、ほぼ同じ時間を教室で過ごしてきたことになる。学生の頃、中曽根首相が臨教審を立ち上げ「赤い教師」はいらないと言って「組合つぶし」を始めた。あれから30余年。以下は2024年の雑感である。

①**子ども親も教員も幼い** 子ども(生徒)は多少自分に都合よく話すものだが、親は子どもの言い分をそのまま受け止めて学校に苦情を言い立てる。近頃は「先生の話し方が怖い」という苦情さえある。威圧的な感じの教員もいるだろうが、「いろんなタイプの大人(教員)がいる」という理解にはならず、学校が対応を求められる。その対応をせざるを得ない教頭が「パワハラだ」と逆ギレされる。教員もまた「幼い」。

②**熱量のない時間** いつからだろう。校長は、式辞でもないのに原稿を読むようになった。だから美辞麗句に「ココロ」が乗っからない。伝わらなくて平気なのか、伝わっていないことに気づいていないのか、私にはわからない。誰でもなのか。ショート・ホームルーム(SHR)で連絡事項しか言わないのは。コロナ禍以降、副担もSHRについて行く。担任していた時には、明日のSHRで何をどう語れば伝わるのかアレコレ考えて、悩んだものだ。

③**おりこうさん** お酒を飲む高校生は減った。派手な金髪の高校生もあまり見ない。スカート丈が短い生徒も注意すれば素直。多くの時間はSNSで「推し」を追いかける。友だちのことはSNSで知る。SNSをブロックされたら、修学旅行に行くのを止め、酷い時には退学する。「こんなでいいのか?」というような、社会への不満や期待は、ほぼない。怒りもない。

こんな学校現場にいて、センターに期待することは「一石を投じること」。学校現場は、古くて新しい問題に満ちている。ただ、それが「問題だ」と認識できるか否かが、大きな問題。人として、教員として、アンテナセンサーが鈍くなったら一大事。センターつうしんを読み、今日も自分の立ち位置を確認させてもらっている。

(高校教員)

急がば回れ 急ぐ必要ホントにあるの？

村井直美

私は、今年から通級を担当しています。昨年は肢体不自由学級ながら、斯く斯く然々……2年生2学級の通級(算数)をしていました。

そこで思うこと。みんな、分かるようになりたいんですよね。

通級にくる子どもたちは、集中力が続かなかつたりうっかりが多かったり。でも、具体物や半具体物を使って操作活動をたくさんやると、だんだん分かってくるんですよ(忘れることもあり、繰り返しますが)。そして、楽しくなっちゃって調子に乗って私にしかかれても、次の回も通級にきてくれるんですよ。

この4月、通級に通う予定の子どもたちの学級での学習参観を何度も行い、いろいろな先生の授業を見る機会に恵まれました。そこで感じたのは、「急いで進めようとしてませんか」「そんなにあっさりでいいの」です。

35年間小学校教員をしていると、どんどん学習内容が下の学年に降りてきて、その学年での学習内容が多くなっているように感じます。教科書の学習進度予定が気になるのも分かりますが、「読み・書き・そろばん(繰り上がり・繰り下がり・かけ算・十進法)」がしっかりしていないところに上積みしても子どもが苦しいだけ。算数・国語、もっと学習の中で遊びを入れて習熟したいですね。

いろいろ愚痴を書きましたが、センターのいろいろな講座開催には感謝でいっぱいです。行ってみると先輩方の教材解釈や多彩な講師陣の講義を聞き「目から鱗」。最近では、高橋源一郎さんによる高校生講座や佐藤学先生のお話など、重い体を引きずって行った甲斐がありました。今後も組合の学習会とセンターの学習会の両輪で、さび付きそうな頭に刺激を与え続けたいと思います。(塩竈・月見ヶ丘小)

転換期に何が大事なのか

苦米地博昭

私はこの春、37年間勤めた仙台市の中学校を退職しました。この37年間で教育現場では大きな変容がありました。そのうち2点について雑感を述べてみたいと思います。

1点目は授業形態についてです。37年前は一斉授業が一般的でした。私自身、教師主体で発問や授業構造など授業改善に試行錯誤したものです。しかし、どうしても、「すべての子どもが学ぶことができているのだろうか」という疑問が残ったことを憶えています。そうした中で示唆を与えられたのが、24年前のセンター主催の佐藤学さんの講演会でした。学さんによると、「授業の中に子どもたちの小グループでの対話や学び合いの場面を取り入れる必要がある。そこに卓越した課題を提示することによって、子どもたちは『問い—探究—表現』の学びを実現することができる」というものでした。新教育課程で文科省が遅まきながら対話的な学びや協働的な学びを唱えています。それ以前から学び合いの芽はしっかりと広がっていたと感じています。

2点目はPCの導入です。37年前は学校でのPCも黎明期でしたが、現在に至るまでPCは業務の効率化に大きく貢献した面はあったと考えています。しかし、GIGAスクール構想とコロナ禍による子どもへのPC端末(タブレット)の導入は現場の状況を一変させています。「現場では子どもたちが皆でPCに向かい操作している。果たしてそこでは手を動かし頭を使っているのだろうか。互いに考えを述べ合い学び合うことができているのだろうか」という疑問が生まれます。たしかにコロナ禍では利するところもありました。しかし、今回のセンター設立30周年を記念しての佐藤学さんの講演では、「現在のPCの使い方は学びの道具になっていない。PCは深い思考、探究的学習に適していない。だから、コロナ禍後の世界では子どものPC使用は一斉に引き上げられている」とのことでした。

転換期にあると考えられる教育現場において、常に何が大事なのかという視点を気づかせてくれるセンターの活動の今後に期待を寄せています。(富谷・富谷小)

環境に適応できない（しない）側が、人間的に進化する！

堀籠 智加枝

中学年の子どもたちは、友だちと楽しいことをすることが大好きで、ものづくりやゲーム、鬼ごっこやボール遊び、折り紙など毎日何かに夢中です。やっぱり子どもってかわいいです。

先日、Aちゃんから「先生は、学校に来年もいる？」と、こっそり聞かれました。どうということかと聞き返すと、「だって、ラッキーカードとか、マックジャンケンとか、たげのご読みとかしておもしろいんだもん」と。Aちゃんは、おちゃめでにぎやかな子。漢字練習は誰よりも丁寧に1画1画しっかり書いています。「今日も丁寧だね。Aちゃんの大好きなお菓子シール、2枚ね！」と言うと、「やったあ！」あと何枚でラッキーカードゲット？と、小躍りしています。男の子たちもラッキーカード集めに夢中で、「日記を10ページ書くぞ」と意気込んだり、音読を30回してシールをゲットしたりしています。今どきは、シールやカードなど「遊び心」が教室にあるとうれしいみたいです。

子どもの「からだ・動き」が変わった、「生活」が変わったと思うことはたくさんあります。現場も「タブレット・QRコード・デジタル○○」と変化しています。社会もおもちゃも変わっているので、子どもたちとの会話も生活も、当然変わってきています。それでも「人間らしく」育てたいと思っています。「手を使うことで、脳が発達する」「人と話したり、伝えたりすることが脳を育てる」と教わり、その大切さを実感しながらずっと子どもと過ごしてきました。「日記や作文を、鉛筆を使って書くこと」「書いたものをみんなで読み合うこと」は人間にとって欠かせない営みで、そのことが人間らしい心や脳の発達を促します。手首を動かしながら文字を書くことは、タブレットの問題を解くこととは違う作用を脳に与えます。

「環境に適応できない側が、進化する」東京で中学校教師をしていた佐藤博さんの言葉を思い出します。何が人間にとって大事かを考え、肝心な部分は譲らずに実践したいです。

(加美・鳴瀬小)

読

者

の

声

◆つうしん112号の感想

小野寺勝徳さんの牛乳の殺菌方法（低温度・長時間と高温・短時間）とを対比し、子どもたちと検討した授業の実践報告。結びとして2つを「対比」して考察する大切さと、「堆肥」のちがいによって旨味を探究していく点も示していて、示唆とユーモアにあふれる論考で、すばらしかった。
(松浦泰一さん)

◆つうしん113号の感想

栗原では「教育に関する話し会」を2か月おきぐらいに開いています。子どもたちや教師が生き生きと学習でき活躍できる教育への願いは、いままも変わっていません。「つうしん」を続けながら、みんなの力で変えていきたいと思います。
(鈴木健三さん)

◆つうしん114号の感想

高橋源一郎さんの「高校生公開授業」の報告が圧巻でした。近代学校教育システムへの鋭い批判と、それに対抗するかのような授業内容が、高校生たちに与える刺激と学びが目に見えるようでした。私もぜひ参観してみたい授業でした。

◆つうしん113号の感想

特別支援学級の担任をしています。朝の会で、ラジオやニュースなどの話題を生徒に話しています。先日のフリー参観でそれをみた保護者から、これからもぜひ話してください。特別支援の子どもにも、その感覚は必要だと。ウクライナ、イスラエル、ガザ、戦争、地球温暖化による海の変化、特産物の変化、LGBTとは、性教育も通常学級と同様に必要な情報を身近な話題、今日の話題として少しずつ、学ぶ、知ろうとするきっかけを与え続けたいと思います。

今回のLGBTのテーマは、養護教諭からの具体的な例を紹介いただき、大変わかりやすく、授業づくりの参考になりました。「無知が人を傷つける」心にグッときました。教える立場の者としてしっかりと学び、考えなければと思います。
(高野綾さん)

学童保育とことば

ポストコロナの学校と 情報化社会とのあいだで

後藤 篤

「だって、あいつが『アオル』から」
先日、山形県の学童保育指導員の
方々とお話をしているなかで、次のよ
うなエピソードをお聞きすることが
あった。

学童の子どもたち2人が喧嘩をして
お互いで解決できなかったようなの
で、「何があったの?」と聞いてみた
ところ、一方の子どもが「だって、あ
いつが『アオル』(煽る)から」と語
り始めた、というのである。指導員
が「それって、どういう意味?」と聞
きかえてみたところ、「わからない」
という。

子どもが「煽る」ということばを使っ
たことに驚いた、という指導員の話
をきっかけとして、他の指導員たちも受
け持つ子どもたちのことばについて
気になることを語りはじめた。発せら
れた「粗暴」ともいえる表現のうち

に、何かを受けとめようとする子ども
理解の技法に感銘を受けることにも、
学童保育という場に現れる子どもた
ちのことばに強く関心を持つ機会と
なった。

学童保育に現れる

〈生活のことば〉

学童保育は、子どもたちにとっての
「生活の場」であるといわれる。そこ
では、子ども・指導員・保護者の共同
で「子ども一人ひとりと、子どもたち
の生活内容を豊かにするための継続
的な営み」(生活づくり)を大切なも
のとしてきた。おやつやお弁当を食べ
たり、休養したり、宿題をしたり、友
だちと好きな遊びを楽しむことがで
きることはもちろんのこと、怪我をし
たときには適切な処置を受けること
ができ、悩みがあったときには友だち
や指導員や保護者に相談できる。

このような安心・安全の場を作る
ことを目的とする学童保育は、「学力」
をはじめとする評価のものさしが張り
巡らされていないゆえに、意図の有無
を問わず、学校におけるさまじりの世界
から子どもたちを解放する可能性へと
開かれている。そしてその先には、子
ども一人ひとりのホンネが現れる。こ
のような場においては学校と比してア
ニメや動画サイト、SNSのなかで獲
得したことばを用いて、コミュニケーション
を試みることも容易であろう。

ここでは、学童保育に現れる子ども
たちのことばを〈生活のことば〉と名
づけ、学校と社会の今日的状況を視野
に入れることで、その性格について検
討してみる。

学校—大人になることを

急かされる空間への変貌

近年の教育改革では「学力重視」(成
果重視)「エビデンス重視」の動向が顕
著にみられる。学校はそのような動向
なかで、すべての子どもたちに「子ども
期」を十分に過ごすことを保障する場と
しての機能を後退させている。そこで教
師たちに求められるのは、子どもたちを
資質・能力の獲得へと最短、最適に向か
わせることとその成果検証であり、子ど
もたちに求められるのは、そのような価
値観にもとづく教育空間への適応であ
る。消費文化(趣味、娯楽)の広がり、
TVやインターネットをはじめとするマ
スメディアの影響から「子ども期の消滅」
(ポルトマン)ともいわれる事態が広が
りを見せてきたなかで、それに加担する
かのように学校は子どもたちを急ぎ立
て、大人になることを求めていく空間へ
と変貌しつつある、ともいえる。

先日の学童保育指導員の話のなかで
は、このような話もあった。算数の宿題
をやっている学童の子どもが「こたえを
教えて」とやってきた。すると、こたえ
を求めるためにプリントの傍に書いてい
た筆算の部分が、消しゴムで消されてい

る。指導員は、この子がなぜつまづいているのか分からないため「なんで、筆算の部分を消したの？」と聞くと、その子は「こたえだけわかればいいから」というのである。

こたえ＝成果のみが、自分を評価する対象となっているのだ。このエピソードは、学校がそのような空間として子どものうちに映っていることを示している。たしかに、子どもたちが成果主義的な価値観を内面化していくことは、近年の現象とはいえない。とはいえ、ポストコロナの学校において「個別最適化」の名の下に進められている新たな学習形態が、成果主義的な価値観をむしろ強化していくものとしてはたらいっている可能性は否定できないだろう。

社会―「重要な他者」の所在

情報化社会といわれて久しい。デジタル大辞泉によれば、情報化社会は「物や資本などにかわって知識や情報に価値が置かれ、情報の生産・収集・伝達・処理を中心として社会・経済が発展していく社会」とされる。

近年は、幼児の時点からインターネットメディアにアクセスをはじめ、2017年、博報堂生活総合研究所が首都圏の小学4年生、中学2年生の男女800名を対象におこなったアンケートからは、スマートフォンをはじめとする情報機器を用いて検索サイ

トや動画共有サイトにアクセスし、そこで知識や情報を獲得することが子どもたちのなかで一般化してきたことが明らかとなった。コロナ禍をあいだにして、アンケートから7年を経過した現在、この傾向は全国的な広がりを見せているものといえよう。

そこで問題となるのは、子どもたちの成長を支える他者の所在である。学齢期の子どもたちの成長にとって、「親」や「先生」を相対化する友人関係によって、自らの存在確認、存在承認、自立を支える基盤を獲得することが重要であることが指摘されてきた。しかしながら情報化社会のなかで、友人関係において情報機器の所有が占める位置が高まっていくとともに、近年に至っては、友人関係に代替されるものとしてインターネットメディアが急速に展開している。ここにおいて子どもたちは、アニメや動画サイト、SNSのうちに自らの「重要な他者」を投射し、彼（女）たちのことばを内面化していく。それは、学校において求められる成果主義的な価値観を相対化する役割を果たす一方で、自らと他者を同一視していく危険性を有している。

ことばをとともに考え、

味わう時間を保障する

児童保育における子どもたちの（生活のことば）を子どもたちが学校にお

いて求められる成果主義的な価値観と、情報化社会のなかで発見する「重要な他者」とのあいだで導かれることばとして位置付けてみたとき、どのように対応することができるか。まずは、冒頭で紹介した児童保育指導員のよう（生活のことば）を正そうとすることではなく、そのことばを通して伝えたかった真意を確認していくことが重要であろう。そして、児童保育指導員がその専門性を活かして、子どもたちとことばを共に味わう時間を保障していくためには、「生活の場」としてのよりよい環境整備と、指導員の処遇改善をはじめとする施策拡充が必要であることも忘れてはならない。

参考文献

- 『児童保育研究の課題と展望』日本児童保育学会編 明誠書林（2021）
- 『児童保育情報2023―2024』全国児童保育連絡協議会編（2024）
- 『改訂テキスト 児童保育指導員の仕事【増補版】』全国児童保育連絡協議会編（2019）
- 『子どもの生活に関する調査』博報堂生活総合研究所（2017）

（宮城大学・みやぎ教育文化
研究センター研究員）

地域の伝統芸能を 伝えたい



佐藤正彦

私の勤務先は登米市立錦織小学校。宮城県の北部、岩手県境に接する登米市東和町にある全校児童59名の小規模校です。学校の西側を北上川が流れ、東側には北上高地南端の山々が遠くに見える自然豊かな所です。また、ユネスコ無形文化財に登録されている火伏の奇祭、「米川の水かぶり」は東和町の米川地区の行事です。現在東和町内には、米川小学校、米谷小学校、錦織小学校の3つの小学校があります。3校とも小規模校で、来年度には東和中学校内に東和小学校として統合することが決まっています。各校とも来年度の統合に向けての準備、そして学校の閉校に向けての作業を進めています。

私は、今年度は6年生12名の担任をしています。定年退職までに、地元の錦織小学校に勤めたいという願いが実現し、本当にうれしい日々です。私が錦織小に勤めたいと思った理由の一つに、「嵯峨立神楽」の子どもたちへの伝承がありました。

もともと登米市は民俗芸能が盛んな土地柄で、特に「南部神楽」は各町域に数団体あり、保存会を主体に脈々と伝承されています。東和町にも米川、米谷、錦織の3地区に「南部神楽」が伝えられていますが、私は生まれも育ちも錦織地区の嵯峨立で、小学校時代から「嵯峨立神楽」を踊っていました。就職後は保存会に誘われ、保存会員として胴取りを務め、伝承活動、祭りや大会への参加、施設訪問などを行っています。米川、米谷、錦織の各小学校では地元の神楽を総合的な学習で学び、神楽の伝承活動、学校行事などでの発表を取り入れてきましたが、来年度の統合に向けての話し合いでは、神楽の伝承活動はいったん白紙に戻すという方向に決まりました。ですから、錦織小での神楽学習は今年度で終了することが決まっています。私は、錦織小での伝承活動には、保存会の一員として10年ほど指導に携わってきたので、今年度で伝承活動が終わることに

寂しさを感じつつも、学校統合であればやむを得ないのかもしれない。

運動会では、例年5・6年生が嵯峨立神楽を踊っています。伝承タイムとしての練習の機会は5回。子どもたちは全校児童数が59名と少ないため、その他にも出番がたくさんあり、係活動もこなしながら、大活躍することになります。保護者席も本当に間近で、自分の子どもと同様に、全児童を心から応援してくれます。しかし、神楽については練習の機会もあまり多くなく、子どもたちもあまり神楽に対して積極的ではないような印象がありました。そんな中、6年生担任、体育主任となり、(神楽はあまり練習する時間はないなあ)と思っていました。始業式の後で教室へと向かう廊下で女の子2名から、



「先生、神楽いつから練習すんの？」
と尋ねられ、(え? 何? その質問、神楽やりたくないってか?)と、とまどいつつも、
「4月後半からがなあ。」
と答えました。

「ああ、早く4月後半になんないかなあ。」
と答えた声を聞き、子どもの中には神楽に対して興味があつて、やる気のある子もいるんだなあと思ひ、驚くと同時にうれしくなりました。神楽は腰を落として脚を開く動作が多く、また日常の動きとは違うために、女の子にとっては恥ずかしく感じてしまい、神楽本来の動きとかけ離れてしまう場合が多いように思っていました。動きの意味を理解し、反復することでも動きは練られていくと思うのですが、5回の練習ではなかなか練られた動きにはなりませんし、恥ずかしさにより小さな動きになってしまうことも見受けられました。ですから、神楽練習を楽しみにしている女の子がいると思うだけでもうれしくなりました。

運動会は5月17日(土)、4月後半に運動会練習がスタート。スローガンは「めざせ! 優勝! 全力で!」錦織小の最後となる運動会を全校児童が全力で取り組む様子を、地区の人たちの目に焼き付けてもらいたいからとい



う、子どもたちの思いが込められていました。

6年生の中に、教室で私と話してくれない子がいて、仲のいい友だち同士だと話しているのですが、担任との会話、朝の会の司会や日直、大勢の人前で声を発することができないのです。神楽練習でも、3人1組での舞なので、大丈夫かなあと思っていたのですが、どうやら神楽は別なようで、普通に会話しながら順番を決めたり、踊り方を見合つてアドバイスしている様子が見られました。練習後、太鼓を片付けているときに、そばに来たので、声を掛けてみました。

「〇〇ちゃん、神楽楽しい?」

「うん」

初めて「うん」と答えられたうれしさで、

「そっかあ、家でも練習すつといいねえ」

と返すと、スーツといなくなつてしまいました。

(しゃべりすぎ?)「よかつたねえ」でよかつたかと悔やみつ、太鼓を片付けました。それから数日後、その子の祖父から、

「毎日、家でも神楽の練習してんだよ。口で太鼓の音言いながら、踊つてんだよお」

という話を聞き、うれしくなると同時に驚きました。というのも、休み時間などに太鼓を口ずさみながら踊っている子どもたちもいるのですが、その子が踊っている様子を見たことがなかったからです。

運動会当日、例年よりもたくさんの方々が来校し、たくさんの方々の声援を受けて、子どもたち一人ひとりがスローガンを胸に大活躍しました。来校された方々からは、口々に、

「錦織小学校最後の運動会にふさわしい運動会だったよ」

との声が聞かれ、子どもたちも充実感でいっぱい運動会となりました。運動会で頑張りたいこととして、6年生12名が神楽を挙げていて、当日も力いっ

ぱい踊る様子に私も胸がいっぱいになりました。地域の方々からは、

「神楽いがつたあ。生の太鼓と子どもたちの息が合つてだねえ。素晴らしがつたあ」
と言葉をたくさんいただき、子どもたちも

「踊りきつたあ。楽しかつたあ」
「先生、神楽すつとやりたい」

と言われ、ますますうれしくなりました。

その後、登米町の森舞台で行われる伝統芸能発表会で、子どもたちに嵯峨立神楽を踊ってほしいと、保存会に出演依頼がありました。出演希望の子どもがいれば、保存会主体で練習をして参加する方向に決まり、子どもたちに申込書を渡しました。すると、8名の子どもが希望し、その中に、私と話してこないあの子も入つており、これにもとても驚かされました。現在6月30日の発表に向けて、夜練習をしています。希望した子どもたち全員で練習に励んでいます。

私は学校教育の中で、地域の伝統芸能を子どもたちが学ぶことに携わるとともに、地域の「保存会のおんちゃん」として、子どもたちの神楽の伝承活動にも携わっていきたくて考えています。東和町内の学校統合に当たり、神楽の伝承活動が学校教育から離れることはとても残念ですが、神楽が好きだと言ってくれる子どもたちのためにも、その受け皿として地域の保存会主体の伝承活動を構築していきたくて考えています。中森先生が「日本の子どもに日本の踊りを」とおっしゃっていた意味が、今なら自分の肌を通して実感できます。表現が得意でない子どもも、神楽という表現で自己表現できるのなら、この神楽の伝承活動が、地域の子どもの健やかな成長の一つになればと思つています。

(登米・錦織小)



おすすめ映画

佐々木忠夫



『異人たち (All of Us Strangers)』

アンドリュース・ヘイ監督 2024年

原作は小説家山田太一として第1回山本周五郎賞受賞作品「異人たちとの夏」。大林宣彦によって日本でも映画化されている。

舞台は現代のロンドンに移り、孤独と愛、喪失と再生、家族の絆、さらに性的マイノリティーがテーマとして描かれている。

40代の脚本家アダムは12歳で両親を交通事故で失う。今は住人2人だけのタワーマンションに暮らしている。

ある日、もう1人の住人ハリーがアダムの部屋へウイスキーを抱えやって来て、「飲まない？」と誘ってくる。その誘いをアダムは断る。

そして、アダムは子どものころ住んでいた郊外の家を訪れる。そこには死んだはずの両親が30年前のままの姿で暮らしていた。両親とひと時を過ごし、心が満たされていく。その後、失われた時間を取り戻すかのようにアダムは両親のもとを度々訪れる。しかし、アダムは両親の交通事故に責任を常感じていた。両親を失って以来、人を愛することができずにいたアダムだが、同じく孤独なハリーと情熱的な恋に落ちる。

アダムの両親の存在のリアリティーがこの映画を成立させる要因である。死者と生者が共存してもおかしくないと思わせてくれる場面がある。30年ぶりに再会した母親は、自分が交通事故で死んだ時の様子をアダムに尋ねる一方で、アダムがゲイであることを受け止められない。確かに彼らは死んでいるのだが、自分の知らない子どもの姿を見たときの戸惑いとそこから愛する子どものすべてを受け入れようとする姿を見ると、死者と生者の共存の不条理などどうでもよくなってしまう。監督のアンドリュース・ヘイの言葉を借りれば、「それは重要なことですか。」である。

そして、ラストシーンも大きなテーマが含まれているように思う。「死は終わりののか」というテーマである。我々も宇宙という生命体の一部に過ぎない。そう思えるエンディングである。

(高校講師)



読書のすすめ (第16回) 矢部智江子

『どうぶつせんきょ』

アンドレ・ホドリゲス ラリッサ・ヒベイロ
パウラ・デスグアウド ペテロ・マルケン作
木下真穂訳 林大介監修・解説 2021年

私は、近所の小学校2校で、絵本の読み聞かせのボランティアをしています。それで、町の図書館に、よく絵本を借りに行きます。その時見つけた本です。とてもおもしろそうだったので、借りてきました。



森の王様だったライオンが、水を独り占めしてプールを作り、森のみんながカンカンに怒ります。みんなはデモをして、ライオンに訴えます。でもダメでした。それでフクロウの助言で、初めての選挙をすることになりました。選挙実行委員会では、選挙の規則も作り、張り出します。立候補者は選挙運動もします。討論会もしました。そしていよいよ選挙。サルは、選挙運動中に、規則を破って有権者にバナナを配り、失格となります。そして、新しいリーダーが決まりました。新しいリーダーはこの選挙で、どの動物にも望みがあり、生活があり、それぞれに大事なものと分かり、議会を作ることになりました。そしてみんなの意見を聞いて、みんなと一緒にゆっくりやっていくことを約束しました。

この本は、選挙や民主主義について、子どもたちが考えるための本です。ブラジルの4歳から11歳の子どもたちが実際に行ったワークショップをもとに作られました。

とても分かりやすく、絵もきれいです。ぜひ読んで聞かせたい本です。ご一読ください。

(元小学校教員)

おすすめ
BOOK



みやぎ教育相談センター相談員 遠藤 理香子

先日、あるお母さんからこんな話を聞いた。今高校2年生になる子が、小中学校で不登校だった時の話だ。小3で登校しづりが顕著になった時、校長・教頭・生徒指導・養護教諭・担任が揃って話し合いをしてくれたそうだ。「学校でできることは学校でしっかりやらせてもらいます。家庭でできることは家庭で宜しくお願ひします。生育歴も教えてください。一緒に見守っていきましょう。」の言葉がとても嬉しかったそうだ。約束事として、①家庭では登校しないことを責めない②学校では登校したらよく来たねと褒める③無理に学校に引き止めない、の3つを設け協力しながら子どもを見守った。4年生になると、④自分で学校に連絡を入れる、という項目が増えたという。「まだ家にいます・途中までなら行けそうです」と自分の状態を連絡する。自立のためには保護者からの連絡より大事な訓練と判断したらしい。時には、途中のコンビニで待ち合わせ、職員と一緒に登校することもあり、その際の対応は、校長・教頭・主幹・SC等その時に身体的空いている職員。校長からは「どの職員が電話に出ても全員が同じ対応をするよう体制を整えておきます」と言われたそうだ。他の不登校の生徒にも、その生徒に合わせた会議や約束を設けて対応してくれた学校や当時の校長に今も感謝していると語っていた。

この生徒が小・中学校を過ごした時期の教育を巡る行政の動きを思い浮かべてみた。

平成29年「教育の機会確保法」が施行。その後のたくさんさんの検討会議を経て、令和元年「不登校児童生徒への支援のあり

方について（通知）」が出された。通知では登校するという結果のみを目標にせず、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すことや、家庭と情報共有し、校長のリーダーシップの下、教員・様々な専門スタッフと連携協力し、組織的な支援体制を整えることという基本的な考え方が表されている。宮城県内では令和2年「学び支援教室」（原「ほっとルーム」4市4校・仙台市「ステーション」5校）が校内に設置され各学校に運営の工夫が任された。そんな時期である。

この生徒が小3の時は平成28年。「教育の機会確保法」が施行される前の年だ。その時期に、校長のリーダーシップの下、家庭と情報共有しながら連携して不登校児童対応をしている学校がもう既にあつたことに驚いた。また4年生で自分で学校に連絡するという約束を加えたのは、社会的自立の意識付けだと考えられる。事前に家庭とよく話し合い、家庭でできること・学校でできることを明確にしながら取り組んでいたことにも驚かされる。この生徒は学校に支えられ保健室・別室・教室を行き来しながら小学校を卒業した。中学では設置されたばかりの「ステーション」があつたため、専任教員が迎えてくれる居場所としての安心感や、所属学年の行事・学習進度の細かい情報が得られる安心感をそこで味わつたという。自分のペースで学校生活を送り3年間を過ごし、いよいよ中学3年進路決定の時期がやってくる。この生徒はデザインの勉強ができる高校を希望した。元々絵画が好きという理由もあるが、不登校の経験を振り返って考えた進路だという。「我なが

らよく頑張つたし『ステーション』に救われ皆に支えられて来た3年間だった。でもどこか隠れるように過ごす自分もいて、学校の行事を思いっきり楽しめる他の生徒が羨ましかった。こんな気持ちを持たずに済む学校の空間を建築や間取りとしてデザインしてみたい。」というものだ。正に自らの進路を主体的に考えて決めた選択だ。小学校以来の自立に向けた丁寧な支援の積み上げが、この生徒のたくましさを育んできたのだと思う。弱みも強みも理解しながら、自分らしい社会との繋がり方を見つけ向かおうとする姿は、正に「教育の機会確保法」が目指している社会的に自立する姿ではないかと思う。今抱くこの夢が、たとえ実現しなかつたとしても、きつとこの生徒は自分を活かす新たな夢に向けてたくましく歩み続けていけるのではないかと思う。

不登校生徒児童数過去最多の約30万人という令和4年の調査結果を受け、令和5年、文科省は「COOLOプラン誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」を取りまとめた。ICTの活用・学校風土の「見える化」等、学びの環境を整備するための提案だ。オンラインで授業と繋がる、一人一台端末で小さな声が可視化させる等の、時代に合わせたスマートな手段を取り入れつつ、不登校児童生徒の社会的自立がさらに促進されることを願っている。

「みやぎ教育相談センター」

TEL 0222-2724152

土・日曜と祝日をのぞき

10時から17時

『虎に翼』から—生きたいように生きる

須藤 道子（センター運営委員）

いま、私はNHK朝の連続テレビ小説『虎に翼』にはまっている。「寅ちゃんの生きたいように生きて欲しい」との言葉を遺して、夫・優三は戦地に赴き、還らぬ人となった。このところの放送では、寅子に、再び法の道を歩む決意をもたらした日本国憲法との出会いが描かれている。偶然手にした新聞で彼女の目に飛び込んできた憲法13条すべて国民は、個人として尊重される。憲法14条（すべて国民は法の下に平等）。

最近、内閣官房の一人としてイラク戦争への自衛隊派遣に携わったという柳沢協二氏へのインタビュー記事を目にした（朝日新聞4/19）。氏は職にあった時代、憲法9条と安全保障政策の整合性について逡巡してきた者として、今、政権が進める9条破壊に抗う立場で発言を続けている。記事では「自分の人生の目的を他者に強制されることなく自分で決めること。そうした価値に対する畏怖の念を持つことこそが政治の原点であるべき」と述べている。

市民同士が命を奪い、奪われる。人が「殺人」という罪を犯すことを、国家の名において強いられるのが戦争であり、戦争に駆り出されることは「すべて個人として尊重される」ことの対極にある。

「生きたいように生きる」、私はここに、私たちが問い続けている「学力とは何か」にも一つの解があるように思う。「子ども自身に、生きたいように生きるとはどういうことかを考えさせ、そのための選択肢を豊かに持つ力をつけること」「すべて人の法の下に平等のもとで」と。

子どもの風景「作品について」……鈴木 裕子（宮城作文の会）……

朝のあいさつ「元気何パーセント？」

6年生になってまだ間もない頃のそら君の日記です。優しい笑顔と口調で、その場の雰囲気や和ませてくれるそら君らしい朝の登校の様子が書かれていました。「寒い」と言って泣き出す1年生を家まで連れて行き、また学校に向かった時に感じた大変さ。でも、次の日に、「今日は元気何パーセントだよ！」と笑顔で自分のところに来てくれた時のうれしさ。登下校の様子は、教えてもらわなければ知らない子どもたちの姿です。優しく、しかも頼もしい六年生のお兄さんであるそら君を誇らしく思いました。

「今日は元気何パーセント？」子どもらしいこのすてきな朝のあいさつが今にも聞こえてきそうです。

日記を読み合うことで、クラスの皆がその子の人となりや新たな一面、考えを知ることが出来ます。そら君の優しさや頼もしさを皆で共有し合うことができました。

センターの動き

＜4月＞

8日（月）「道徳と教育」学習会…

二宮尊徳

12日（金）第1回事務局会議

13日（土）『教育4月号』読む会

『給食無償化』集会

15日（月）ゼミナール Sirube

『人間とその術』第11回

27日（土）民主教育を進める宮城

の会総会・増山均講演会

＜5月＞

10日（金）第2回事務局会議

11日（土）研究部会

17日（金）国語講座、新世話人会

18日（土）『教育5月号』読む会

『教科書問題のつどい』

24日（金）第3回事務局会議

27日（月）ゼミナール Sirube

『人間とその術』第12回

＜6月＞

2日（土）『従軍慰安婦問題』講

演会

8日（土）センター創立30周年記

念シンポジウム 45名参加

『地球時代、これからの教育

をどう創るか』堀尾輝久

シンポジスト

久保健 千葉建夫

須藤道子 伊藤慶

11日（火）教育会館理事会

12日（水）国語講座、第2回世話

人会

14日（金）第4回事務局会議

15日（土）『教育のつどい2024』

第1回実行委員会

17日（月）「道徳と教育」学習会…

『葉隠』

19日（水）第1回運営委員会

24日（月）ゼミナール Sirube

『人間とその術』第13回

28日（金）『つうしん115号』

発送、第5回事務局会議

編集後記

みやぎ教育文化研究センターの設立30周年として2月23日に行った佐藤学講演会『子どもと学校の危機をどう克服するか』の記録をお届けします。子どもたちはどんな社会を生きているのか、そのために必要な教育とは何かを語っていただきました。それから、教育・子育てとセンターに対する期待を讀者のみなさんから寄せていただきました。次号でも続きます。みなさんもぜひお寄せください。

記念事業の2回目として、6月8日には、堀尾輝久先生をお招きして、シンポジウム『地球時代、これからの教育をどう創るか』を行います。内容については次号で紹介いたします。当日は、中森孜郎先生も最初から最後まで参加していただき、しっかりとのお声でご挨拶もいただきました。堀尾先生は91歳、中森先生は97歳。堀尾先生は、最後にご自分が作詞作曲した『地球憲章の歌』を張りのあるお声で歌っていたとき、参加者はお2人から元気と勇気をいただきました。（達）

